

提言

自民党圧勝の眞の意味を問う
今こそ国民の安心・安全・安泰を！

本誌主幹 大中吉一

11月2日、トランプ米大統領の長女・イバンカ米大統領補佐官、そしてこれに続き5日にはトランプ氏がそれぞれ訪日。日本にとって今年最大の外交的イベントも恙(つつが)なく終り、両国の友好親善のドアはより一層大きく開かれた。率直に素晴らしいと賛辞を惜しまない。

ところが、安倍政権の足元を見ると、決して褒められるものではないように思える。北朝鮮の核・ミサイル問題など日本にとって戦後最大の安全保障の危機であり、解決の糸口が全く見えない状況にあるのは周知のとおり。加えて、自らが引き起こした「森友・加計問題」は、「いい加減答弁」で強行突破。さらに、今年8月に発足した第3次安倍第4次改造内閣は、「仕事人内閣」と銘打つものの、閣僚らが果たしていかなる仕事ぶりを発揮したのかも分からぬじまい。そしてそのまま、衆院解散へと雪崩れ込む次第である。

先の衆院選挙は野党側の敵失で圧勝。自民党が安定多数を確保したことは、結果的には国民の「安心・安全・安泰」の保持に寄与したと言ってもいいだろう。しかし、現政権に対し国民が全幅の信頼を置いている、と努々(ゆめゆめ)思ってはならない。

先の都議選で安倍氏は、「このような人達に負けません」と強気の演説を放ったものの、結果は議席を3分の1にさせて惨敗、苦杯を嘗めたのが何よりの証左である。

にもかかわらず、安倍政権はそれ以降本当に猛省しているのだろうか。本誌前号でも「安倍氏のための選挙」と論じたが、これすらも省みることなく、閣僚は全員続投。もちろん、これも国民の「安心・安全・安泰」に利すると捉えることもできよう。だが、よくよく考えれば、留任した閣僚達は「仕事人」を自負しながら、具体的にいかなる仕事を果たしているのか、そして、これから何を果たそうとするのか。この内閣が事実上旗揚げしてすでに3カ月余の時間が経過したものの、いまだに曖昧模糊の状況にある。彼らの働きぶりに対しては、国民一人ひとりがしっかりと凝視し、チェックする必要があるだろう。

衆院選後の会見で安倍氏は、「謙虚な姿勢」を前面に掲げ、自民党幹部にもこの文言が徹底された。「猛省」を匂わす意思統一が部内で行なわれたのは明らかである。ところが、一方で、「総選挙において我が党が3回連続で過半数の議席をいただいたのは、ほぼ半世紀ぶり」「同じ総裁のもとで3回続けて勝利を得たのは立党以来60年余りの歴史の中で初めて」ともアピール、凱歌を揚げることも忘れなかった。自画自賛が「驕り」へと変貌しないことを祈るばかりである。

今後は猛省・謙虚に立脚した上で、国民が充分に納得する政策を提示し、内閣総理大臣としての説明責任を充分に果たし、そして旗揚げした立憲民主党や希望の党など、野党からの質問にも懇切丁寧に答えることを願いたい。

「解散総選挙と自民党圧勝」、そして「トランプ大統領訪日」——。安倍政権にとって、今一度腹を据えて、脇を締めて、この国のあり方、行方を定める絶好の機会なのではないだろうか。

KōRON